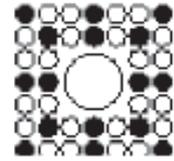


Newsletter of the British Council Japan Association

BCJA Newsletter

No.33

April, 2017



● お知らせ ●

奨学基金への寄付を募ります

BCJA 奨学基金は、BCJA 会員の有志の方々からの寄付金を基盤として、英国留学生の支援活動を着実に進めてきております。今年度も奨学生の募集を行いますので、奨学基金へのご寄付をお願い申し上げます。

(詳しくは、本ニューズレター12 ページをご覧ください。)

募金計画

- ◆ 寄付金額: 一口 5,000 円
- ◆ 口座番号: 00180-0-426794 (ゆうちょ銀行)
- ◆ 加入者名: BCJA 奨学基金
同封の振込用紙をご利用くださいませ。

年会費の納入をお願いします

BCJA 運営のため、年会費の納入をお願いいたします。

納入方法

- ◆ 年会費金額: 2,000 円
- ◆ 口座番号: 00180-0-426794 (ゆうちょ銀行)
- ◆ 加入者名: BCJA 奨学基金
同封の振込用紙をご利用くださいませ。

BCJA 役員および執行部を募集いたします!

BCJA の運営のためにご協力いただける方を随時募集しております。Google グループなどで活動も行ってしておりますので、是非ご連絡ください。

ご連絡先

- ◆ Google グループ URL
<https://groups.google.com/forum/?hl=ja#!forum/bcja-member>
- ◆ メールの方は: ishiikayoko@hotmail.com

2016 年 BCJA 年次総会について



BCJA 会長 青柳昌宏

2016 年の BCJA 総会については、昨年に引き続きまして西田先生のご厚意により根津美術館の講堂を使わせていただき、2016 年 11 月 19 日(土)に開催させていただくことができました。なお、総会の前に、開催中のコレクション展「開館 75 周年記念特別展: 円山応挙-写生を超えて-」を鑑賞させていただきました。また、懇親会は、場所を変えて開催させていただきました。以下が議事の内容になります。

◆BCJA 総会 (15:30-15:50)

(1) 会長報告と審議

16年目を迎えたBCJA奨学金は、例年レベルの応募数があり、優秀な奨学生5名を英国留学に送り出しました。一方、BCJA 会員の高齢化により会員数が減少しているため、奨学金への寄付総額は、徐々に減少する傾向にあり、奨学金の運営を維持するためには、BCJA 奨学生に対する会員登録への積極的な勧誘および役員会への参加勧誘などを検討する必要があります。一方、奨学生独自の OB 組織の準備について、有志により定期的な会合が開かれており、今後の発展が期待できる。その他、BCJA および奨学金が抱える課題について、議論を行った。

(2) BCJA 奨学金報告: ニューズレター33号参照

(3) 会計報告と承認: ニューズレター33号参照

(4) ニューズレター・ホームページ報告: ニューズレター33号参照

(5) 新役員および新執行部の選出

会長: 青柳昌宏

会計: 島津幸男

講演会および AGM 担当: 西田宏子、山口晶子
ニューズレター担当: 石井加代子
BCJA スカラー担当: 斉木臣二
役員: 白鳥令、青柳昌宏、平正臣、池島大策、出来尾格
(敬称略)

の方々が承認されました。

◆BCJA 奨学生 OB 近況報告(15:50-16:50)

(1) 浜田将太氏(医療経済研究機構)

「ロンドン大学キングス・カレッジにおける疫学・公衆衛生に関する研究活動」

私は 2014 年 4 月から約 2 年間、キングス・カレッジ・ロンドンに留学し、数万人規模の臨床データに基づいて、糖尿病患者の疾病管理について研究を行いました。2014 年度 BCJA 奨学生としてご支援いただきましたこと、改めまして御礼申し上げます。

総会では、まず私の専門とする“疫学”発祥の地であるロンドンの公衆衛生の歴史を振り返り、日本における西洋医学の導入・発展との関わりについて紹介しました。その後、私が行った研究テーマのひとつである“高齢糖尿病患者の治療目標はどうあるべきか”について研究結果を交えて報告したところ、鋭い視点から活発な質疑をいただき、改めて自分の研究を見つめ直す良い機会となりました。

帰国した現在も留学先の研究室とはいくつかのプロジェクトで協働しています。留学先の先生方はもちろんのこと、イギリスだけではなく様々な国・地域の同年代の研究者とつながりができたことはこれからの財産になるものと確信しています。イギリスは EU からの離脱(“Brexit”)等、激動の渦中にありますが、これからも多くの学問分野で中心的な役割を担っていくと考えられます。今後は留学希望者を支援する立場で、何らかの貢献をしていきたいと思えます。

(2) 斉木臣二氏(順天堂大学)

「大隅教授がノーベル賞を受賞したオートファジーとパーキンソン病に関する研究活動」

2005 年 BCJA 奨学生の斉木臣二です。私は以前にも奨学生としての英国留学時代および帰国後の近況報告をさせて頂きましたが、今回、現在の BCJA 奨学生経験者の交流会についての報告、並びに英国留学中から私が専門としてきたオートファジー(2016 年 11 月に大隅良典東京工業大学栄誉教授が本テーマの発展についての功績でノーベル医学生理学賞を受賞)について、簡単な研究内容の紹介をいたします。

1) 英国留学者交流会について

毎年 2 回(10 月と 4 月)英国留学者交流会(BCJA 奨学生経験者も常に 5 名前後参加)を行っています。これまでに開催した場所は東京神田のイタリアンレストラン、東京神田の British Pub、神楽坂の Scottish Pub であり、今後も場所を変えつつも英国の雰囲気を感じられる Pub での開催を考えております。また参加者は、30 歳代前半から 50 歳代前半まで

幅広く、ビジネス関係から研究者(文系理系問わず)まで多岐にわたっており、非常に刺激に富んだ環境を与えてくれます。BCJA 総会のメンバーの先生方にも、是非ともご参加頂けるようにしていければと考えております。

2) オートファジー研究について

2016 年に「オートファジーに関する研究」にて大隅先生がノーベル医学生理学賞を受賞されました。ノーベル賞というのは、独創的な新発見により新たな研究領域が形成され、そこに多くの研究者が参入することにより同研究領域が膨張し、その重要性が十分に証明され、人類の健康に役立つ確証が得られるようになった場合、その発展に不可欠・最も重要な発見をした研究者に贈られるものという一般的な認識があります。本領域の場合、1993 年に大隅先生らが発見されたオートファジーに不可欠な複数遺伝子の同定が大きなブレイクスルーとなり、以降はその弟子の先生を中心にオートファジーそのもののメカニズムに関する研究が加速度的に進み、2000 年頃からはヒトの各種疾患(サルモネラ菌・大腸菌・結核菌などの感染症、がん、免疫性疾患、中枢神経変性疾患など)に重要な役割を果たすことが証明されつつあります。私はその中でも、パーキンソン病をはじめとする中枢神経疾患について、オートファジーの果たす役割を解明すること、オートファジーを促進させる化合物を発見し、その根本的治療薬として開発することを目標に研究を続けています。現時点で、ヒト疾患への治療応用としては、各種がんに対してオートファジー調節による腫瘍細胞増殖抑制・細胞死誘導を目標とした臨床試験が米国を中心に行われていますが、標準的な治療として確立されるには至っておりません。

オートファジー研究は多くの優秀な日本人研究者によって牽引されてきましたが、私は英国で本研究を開始し、多くの方のご尽力・ご配慮により、帰国後も継続することができるという幸運に恵まれました。今後も本研究を発展させ、少しでも早くオートファジー調節薬の臨床応用を実現するように邁進していくと同時に、BCJA での活動を含め、英国での独創的な研究を日本人研究者が行うことができるような環境整備にも微力ながら努力し続けたいと考えております。

◆懇親会(17:00-)

(総会についてのお問い合わせは、
masa_aoyagi5@yahoo.co.jp までお願いいたします。)

2016 年度 BCJA 英国留学奨学金の審査を終えて

——募金へのご協力に対する感謝とお願い

BCJA 英国留学奨学金審査委員会 委員長 白鳥 令

2016 年も、別表の通り、5 名の非常に優秀な方々に BCJA 英国留学奨学金を差し上げることが出来ました。これ程喜ばしいことはありません。

2016 年度奨学金授与者リスト

氏名	出身校/所属	留学先	分野
佐村淳知	京都大学医学部	London School of Hygiene and Tropical Medicine	Public Health (Health Services Management)
荒木啓史	東京大学大学院教育学研究科	Department of Sociology, University of Oxford	Sociology of Education
森上翔太	東京大学大学院法学政治学研究科法曹養成専攻	Faculty of Law, University of Cambridge	British Parliament (Private Members' Bills)
柳田絢加	東京大学大学院医学系研究科病因・病理学専攻	Cambridge Stem Cell Institute, University of Cambridge	Developmental Biology (Early Embryo Development)
齋藤(梶原) 麻里	福井大学医学部医学科	London School of Hygiene and Tropical Medicine	Public Health (Cancer Epidemiology and Health Economics)

BCJA (British Council Japan Association) は、ブリティッシュ・カウンシルの奨学金を受けた者をはじめ、短期、長期にかかわらず、これ迄英国に何らかのかたちで留学をした経験を持つ人達の集まりです。BCJA 英国留学奨学金は、BCJA の会員達の善意の寄付で運営されています。日本が経済大国に発展し、英国政府の奨学金が日本に適用されなくなった 13 年前、BCJA 会員は、日本の学生や研究者が英国留学の機会を得難くなる危機を感じてこの奨学金を設立し、本年で 13 年を経過しました。この英国留学奨学金が本年も継続出来たのは、ひとえに BCJA 会員の皆様のご厚意によるものと、厚く感謝申し上げます。

私共は、この BCJA 英国留学奨学金を、出来るだけ価値のある奨学金にする努力を続けて来ました。そのために、奨学金の授与者の質は、常に第一級の人物を選考するようにして来ました。また、BCJA 英国留学奨学金と他の奨学金とを、重複して受けることも認めています。その結果、英国の多くの研究教育機関で、本奨学金の授与者に他のより高額な奨学金を同時に与える状況が生まれています。さらに、私共は、BCJA 英国留学奨学金の使用法に制限を設けないようにして居ます。BCJA 英国留学奨学金は、研究旅行でも資料購入でも、あるいは留学中の生活の補助に使用されてもよいのです。この点が、応募者の数を増加させ、授与者の質を高めているのも事実です。

英国の教育・研究機関に、特に大学院や研究者のレベルで留学することには、特別の意義があるように思われます。それは、英国の大学や研究機関は高度に国際化していて、そこに留学することで世界中の知恵・知性と遭遇することが出来るからです。また、開発途上国援助などを目指して居る公衆衛生や環境問題の研究者は、旧植民地での経験を豊富に持つ英国の研究者から、一段とレベルの高い理論や知見を得ることが出来ます。

私共は、選考に際して、特に留学資金の援助を得る機会の少ない人文科学や芸術の分野にも留意するようにしています。本年度も、非常に優秀な歴史学分野の研究者が居たのですが、残念ながら僅差で選考されませんでした。

この様な時、選考委員は、「もう少しわれわれの奨学金の資金量が豊かなら、この応募者にも奨学金をあげることが出来るのに」と、残念に思っています。

どうか、今後も BCJA 英国留学奨学金を存続できるよう、本奨学金の趣旨をご理解の上、BCJA 会員をはじめ英国と関係のある方々に、善意の寄付を心からお願い申し上げます。

BCJA 英国留学奨学金の寄付の方法

- ◆ 寄付金額: 一口 5,000 円
- ◆ 口座番号: 00180-0-426794 (ゆうちょ銀行)
- ◆ 加入者名: BCJA 奨学基金

2010年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告

SOAS で開発学を学ぶ

吉見 蘭

私は、2010年度 BCJA 奨学生としてロンドン大学アジア・アフリカ研究院 (SOAS, University of London) 開発学修士課程にて学ばせて頂きました。30歳を過ぎて英国大学院留学を決意した私にとって、BCJA 奨学生として認めて頂いたことは、留学中の大きな心の支えとなりました。改めてこの場をお借りして BCJA の皆様に厚く御礼申し上げます。

留学までの経緯

留学する以前は、日本政府が実施する発展途上国での人材育成支援事業をはじめ、国際開発援助業務に従事していました。業務は支援対象国に長期赴任し、現地のニーズ調査から、関係諸機関との連絡調整、プロジェクト事務所の現地スタッフの管理に至るまで多岐に亘り、現場で支援対象国の開発課題を目の当たりにしてきました。その中で、開発援助事業における多くの問題点や改善点を見出すに至り、学問的見地から、それらの課題をどのように認識および分析すべきかを学ぶことで、より効果的かつ意義深い事業実施に貢献ができるのではないかと考えました。

SOAS での学び

私が留学先として選択したのはロンドン大学 SOAS でした。ロンドン大学の1カレッジとして大英博物館から程近いロンドン中心部に位置する SOAS は、アジア、アフリカ及び中近東の地域研究や人類学、言語学、開発学の研究・教育に注力しており、当該分野では世界的にも非常に評価の高い大学です。しかしながら、英国は開発学の発祥の地でもあり、開発学、開発経済学、プロジェクトデザインや事業実施手法を学べるよ実務直結型のコースまで、多くの大学が非常に魅力的なカリキュラムを提供しています。

それら多くの選択肢から実際にどの大学のどのコースを選択するかにつき日本で得られる情報量には限界がありました。そこで、私はいくつかの大学院から合格通知を頂いた後、修士課程が開始される約4ヶ月前に渡英し、英語力の研磨と生活の事前セットアップも兼ねて少し早く英国での生活を開始しました。早くにロンドンに到着したことで、留学先候補としていた大学を訪問し、実際にコースを履修している学生から、コースデザインや講義内容、講師陣についての詳細情報を教えて頂くことができました。そして最終的に、開発援助理論が深く学べ、開発援助のあり方に批判的な観点から課題分析できる能力が養えると判断した SOAS の開発学 (MSc Development Studies) コースを選択することにしました。

履修科目として「開発政治経済」と「開発理論と実践」という二つのメイン・モジュールで理論を学び、さらにその理解を深めるために、マクロ経済学の授業や、実務経験者向けの

開発援助プロジェクト実施における問題点を事例ベースで検証できるコース等も選択することができました。世界の第一線で活躍する著名な教授陣は情熱的で素晴らしい講義をされる方が多く、現在進行形で開発援助事業に関わっておられる研究者もおり、講義のある日は少し緊張しながらも、心躍らせるような気持ちで大学に向かっていました。

また、私の選択したコースは国際色が非常に豊かで、援助国側の政策立案やプロジェクトマネジメントに関わっていた実務経験者もいれば、援助対象国であるアジア、アフリカの政府関係者も在籍しており、講義の聴講と関連文献を読んだ後のチュートリアルで繰り広げられるディスカッションは、私にとって講義を受講と同等もしくはそれ以上に興味深く、そして学びの多い貴重な時間でした。世界各国から集まった学生が、講義とリーディングから得た理論的な知識に加えて自らの実体験を交えながら議論を進めて学び合うというスタイルは、日本の大学を卒業した私にとっては新しい学びの形でとても刺激的でした。こういったディスカッション中で実際に発言できるようになるまでは緊張と不安も大きかったものの、英語を使って論理的にディスカッションをするというスキルを少しでも身につけられたことは英国留学の大きな成果の一つであったと思います。

また、開発援助にかかる既存研究を読み込み、現行の開発援助機関の方針や実施中のプロジェクトの現状およびそれらの分析手法を学ぶ中で、自分の実務経験を振り返り、今までの自分の無知や視野の狭さに気づかされる日々でもありました。それは、1年間という短い留学期間中にいかに多くのことを学び得たかという証拠でもあると思います。開発援助という支援対象国にとって甚大なインパクトを与える事業に今後どのように携わり、またどのような貢献ができるかを考えながら、文献を読み学生との活発なディスカッションに参加した経験は私にとってかけがえのない財産になりました。

修士論文では、過去に実務で長年担当してきたモンゴルの発展について検討しました。近年は金、銅、石炭をはじめとする豊富な鉱山資源で注目されることの多いモンゴルですが、豊かな資源があるが故に発生する開発課題につき、オランダ病もしくは“the Paradox of Plenty”とも呼ばれる、Resource Curse(資源の呪い)論を主に参照しながら、他の天然資源保有国の開発事例との比較検証を行いました。BCJA で頂いた奨学金を活用し、過去のモンゴル長期赴任中に知り合った知人友人にも協力を頂くことで、現地調査のためモンゴルを再訪し、関連省庁の役人や政治家、鉱山会社関係者等へのインタビューを実施するとともに、様々な関連データを収集することができました。

ロンドンでの生活

特に修士課程開始後間もなくは、一度の講義聴講では詳細が聞き取れず、十分に理解できないこともあり、授業を録音して再度聞き返し、リーディングリストにある膨大な文献を読むのに大変苦労しました。講義終了後も図書館で勉強するため夕食も大学の学食で簡単に済ませ、23時の閉館時間

までみっちり復習予習をしても、まだまだ手付かずの文献があつて途方にくれることも多々ありましたが、同じコースの受講生たちと情報交換し、励まし合いながらの学生生活はとても充実していました。

また、留学開始当初は Kings Cross 駅近くの SOAS の学生寮に住み、世界各国から集まってきた学生たちが話すアクセントの強い英語に触れ、その後は仲良くなった同じく SOAS に通うイギリス人学生 2 名と民間アパートをシェアして生活をしていました。ロンドンで暮らす学生にとっての定番であるフラット・シェアと呼ばれる、この賃貸物件シェアスタイルでは、自宅の台所やリビングルームを毎日同居人であるフラットメイトと共同で使用する状態が続くため、気がつけばフラットメイトが家族のような存在になっており、日々様々なトピックにつき英語で会話する機会に恵まれました。留学先でこうして大切な友人ができたことに加え、留学当初は苦手意識の強かった英語のスピーキング能力も飛躍的に伸ばすことができたことは大きな収穫でした。

また、休日は Royal Opera House や Barbican Center でクラシック音楽やバレエを鑑賞したり、前衛的なダンス・パフォーマンスを多く公演する Sadler's Wells Theater にも何度も足を運びました。ロンドンには世界的に有名な素晴らしい博物館、美術館も多い為、勉強に疲れたと感じた時に美術館に立ち寄って時間を過ごしていると、文化・芸術的に極めて恵まれたロンドンで留学生活を送れていることに感謝せずにはいられない気分でした。

現在そして今後について

SOAS で修士号を取得してから間もなく、国際協力機構 (JICA) が実施する開発援助事業担当としてスリランカに赴任し人材育成事業を担当しました。その後、夫の研究上の都合と育児との兼ね合いもあり、現在は北海道大学にて国際共同研究のプロジェクトコーディネーターをしています。現在の職務は開発援助事業とは直接的な関係はないものの、発展途上国の優れた学生に奨学金を支援して私の担当するサマースクールに参加する機会を提供させて頂いたり、途上国の人材育成に微力ではありますがサポートできていることを嬉しく思います。

開発援助分野での業務は海外赴任や長期出張の必要が生じる場合も多く、子育てと両立するのは難しい側面もありますが、子育てがひと段落した際にはまた自分の専門分野で活躍することを目標にしております。最後になりましたが、こうして子育て中にもやりがいを感じる職務に従事し、近い将来に専門分野への復帰に展望を持つことができるのも、BCJA の皆様をはじめ、多くの方々との出会いによって支えられた実り多き留学経験のお蔭です。これからも感謝の気持ちを忘れず、一日一日を大切に精進したいと思います。最後になりましたが、このような素晴らしい機会を与えて頂いた BCJA に心より感謝申し上げます。本当に有難うございました。

(2010 年度 BCJA 奨学生、SOAS, University of London)

2013 年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告

留学報告

木原 まり

私は 2013 年 9 月から 2014 年 9 月まで Imperial College London、Master of Public Health にて学びました。BCJA 奨学生として支援していただきました皆様に心より御礼申し上げます。

私は、日本で膠原病・リウマチ内科医として働きながら、特に、抗リウマチ薬の有効性と安全性に関わる疫学研究に興味をもっていました。疫学研究発症の地である英国において、それらに関する知識を高めたいと思い、この度の留学を決意しました。

Imperial College of London は、医学、工学、理科学の分野で世界のトップレベルの大学です。その中で、私の属していた Master of Public Health は比較的新しく、学生数 40 人ほどの小規模なコースです。Term1 で講義、統計ソフトを使った実習、ジャーナルクラブ、ディスカッション等を通して、公衆衛生、疫学、統計の基礎を学びました。Term2 では、医療政策、医療経済評価研究の手法、Systematic review の手法などについて学びました。Term1,2 とも学期中に小テストや論文の提出、グループワークでの課題の提出が度々課され、期末には論述式のテストがあり、いずれも合格率は厳しく、勉強は大変でしたが、学習をサポートする体制が充実しており、勉強することを楽しむことができました。また、Term2 の一部の選択授業を除いてコース全体が同じ授業、課題を共有しているため、一緒に勉強したり、テスト後に打ち上げをしたりすることを通して友情を育むことができました。Term3 では、各自研究テーマを選ぶことができたため、私は、Respirology Epidemiology の研究室にお願いし、ヨーロッパ全体から集められた患者データベース (European Community Respiratory Health Survey) を利用して、成人における Th1 優位な自己免疫疾患である関節リウマチと喘息、アトピーなどの Th2 優位なアレルギー疾患との発症の関連性をテーマに研究を行いました。Term1,2 で学んだ統計、疫学の知識を実際の疫学研究の中で実践することができ、理解を深めることができ、実際に疫学研究に必要な解析の技術なども身につけることができました。研究の間、教授が supervisor として指導してくれ、post-doctoral fellow の先生が co-supervisor としてより細かい指導をしてくださいました。最終的に 10,000 語の論文としてまとめ、プレゼンテーション、口頭試問を受け、合格し、コースを修了しました。

同過程で学ぶ間に、University of Manchester、Arthritis Research UK Centre for Epidemiology の教授にメールを送ったところ、Research Fellow として受け入れてくれ、2014 年 10 月から同センターに移り、イギリスリウマチ学会の患者データを用いて研究を行わせていただきました。帰国後、留学

中に行った研究を学位論文として、2017年3月東京医科歯科大学にて医学博士の学位を取得しました。BCJAの応援を受け、Master of Public Healthの学位を取得することができ、またそれが次の研究、学位取得へと発展していくことができ、深く感謝しています。今後ともこの度の留学経験を活かし、リウマチ分野における疫学研究に従事貢献していきたいと考えています。

(2013年度BCJA奨学生、Public Health, Imperial College London)

2014年度BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告

留学レポート

川野 裕介

2014年9月から2015年9月までUniversity College LondonのComputer Science修士課程にて学ぶ機会を得ました。BCJA奨学生に選んでいただいたことに非常に感謝しています。

留学するきっかけ

私は大学を卒業して大分県庁に入庁し、主に情報政策部門に在籍しております。

学生時代の専攻は経営学で、いわゆる情報科学を体系的に学んだことはありませんでした。業務としてシステム開発業務を行う一方で、書籍等で自学自習して知識を身につけてはいたものの、委託業務の成果物や庁内に常駐されているSEさんの作成する成果物と比較すると、自分のアウトプットのレベルが見劣りしていたのは明白でした。無給で最大2年休職できる制度を利用して勉強しようと思いついたのが、留学をするきっかけでした。IT分野ではアメリカの大学が有名ですが、当時既に結婚していたこともあり、1年間で修了することができるイギリスの大学院で勉強しようと決めました。

実際に留学するまで

フルタイムで仕事をしつつ夜間や休日に勉強や留学準備をするというのは想像以上に大変でした。また、私は地方在住であるため必然的にインターネットに頼らざるを得ない状況だったのも漠然とした不安感がありました。

幸い、入学許可は得ることが出来たものの、仕事の関係で1年入学を延期することになるなど紆余曲折ありましたが、2014年8月に渡英することになりました。

留学生活

社会人生活を経てから学生に戻るとというのは、新鮮な経験でした。

毎日決まった時間に同じ場所に行かなくてよいということ、1つのことに長時間集中して取り組めることは貴重なことだと

改めて感じました。

大学では座学が3分の1、アプリケーション開発プロジェクトが3分の2でした。教授が「このプロジェクト経験はCVに書けるぞ(経験としてプラスになる)」とか、発注者が「良いプロダクトが完成したらリファレンスを書くよ(≒期待値以下なら書かない)」などと、事ある毎に学生が自発的に努力するよう発破をかけていました。

プロジェクト終盤になると、様々な企業が学生に面接を受けないか、こんなプロジェクトがあるから卒業後に参加してみないか等、就職氷河期に就職活動をしていた私からすると、天と地の違いでした。

学生生活で驚いたこと

私が大学生だった頃は、教科書・ノート・筆記用具で授業を受けていましたが、ラップトップとスマートフォンを駆使して授業を受けているのはカルチャーショックと世代間格差を感じました。板書をノートに書き写すのではなく、カメラで撮影したり、素直に賢いな!と感心してしまいました。

授業を受ける姿勢も国によって全く異なっていました。授業開始前はひたすら喋っているイギリス人でも、授業開始後は私語は一切せず真剣に授業を聞いている一方、授業中でも小声で喋り続けている中国人、一切授業は聞かずプログラミングをしている者など。また、自分にとって聞く価値がないと判断した場合は、途中で退室する者など、驚くほど多様性があると感じました。

また、私の昔の記憶では、授業といえば教員から学生への一方通行で、意見を求められても発言する学生はほとんどいなかったのですが、当地では質問をする学生が多く、かつ、その内容も鋭いものが多かったように記憶しています。

プロジェクトについて

Computer Science専攻の学生は年間を通してほぼ何らかのシステム開発プロジェクトに参加していました。

私は、年の前半はWindows Phoneのアプリ開発、後半はWebシステムの開発をしており、余力のある学生は企業が開催しているハッカソンやプログラミングコンテストに参加しているものもありました。

4月から8月の間は論文の題材となるプロジェクトに参加しました。このプロジェクトではイギリスのケント州が発注者となり、ケントの個人事業主や小規模店舗の集客アプリを開発することを目的としていました。単なる集客だけではなく、人の流れ(中心市街地の人の動きや実店舗に人の動きを設置するセンサーを設置してどの商品に人気があるのか、モノの配置は適正なのか)を判断して、利用者に最適な広告を配信することができるようにするのが最終目標でした。

当然ながら、学生だけで完成するものではありませんので、学生に加え技術的サポートとしてマイクロソフトUKの社員が定期的にミーティングに参加するなど、本格的なものでした。

プロジェクト開始当初は13人いた学生も、早い段階から

別のプロジェクトに移ったり、逆に他のプロジェクトから移ってくる学生もいるなど、混沌とした状況でした。

私の担当はユーザーが利用する web インターフェースの開発を割当てられました。当時の心境としては、インターフェースを作成することにはあまり興味はなく、センサーデータの取得やデータの解析を希望していたのですが、今となっては、逆にこの経験が今後役に立つなと感じています。というのも、自治体で導入しているシステムには、まだまだユーザーインターフェースが使いやすいとは言い難いものがあります。Web 画面を人間が見た時に、まずどの部分に目が行くのか、ボタン等のイベントが発生した時に何秒以内であればストレスを感じないのかといった文献を読めたこと、マイクロソフトからのフィードバックをもらえたことは貴重な経験だったと思います。

また、日本の役所の中でしか経験がない私にとって、Skype で開発ミーティングをすることや、打ち合わせでは紙を一切使用せずに Google Document を使用してリアルタイムで議事録を作成していくことなど、信じられないことの連続でした。

意思決定のスピードは役所とは比にならないほど速いです。私の経験では、公の場で全員一致するように事前に根回しを行い、どのような質問にも回答できるよう(電子データではなく紙で)完璧な資料を作成して、会議や打ち合わせに臨むというのが通常のやり方でしたが、前述したように紙は一切使用せず、各人のラップトップでドキュメントを適宜追加修正していくのが新鮮でした。また、会議の時間自体も大幅に短かったように思います。

留学中の息抜き

ロンドンでの息抜きは主にコンサートを見に行っていました。趣味で UK や US のロックを聞いているので、来日したことがないアーティストを間近で見ることができたのはよかったです。あるアーティストが新譜を発売するにあたって、レコード店でサイン会が開催されました。私はそのアーティストの大ファンで、冬の雨が降るなか、1 時間ほど待ってレコードにサインをもらえたのですが、日本では全く有名ではないので、本人と話せたことはもちろん、ファンが数百人いることに感動してしまいました。

帰国後の状況

帰国してからは県庁の情報政策部門に配属となり、庁内システムのクラウド移行とマイナンバーの導入に伴うシステム改修支援などを担当しております。

先月発生した熊本地震の影響を受け、年度当初は情報収集やシステムを設置しているサーバ管理等で多忙な状況でしたが、5 月下旬現在では落ち着きを取り戻している状況です。熊本県に派遣された職員によると、被災者の方々のみならず、自治体の職員も被災してしまっているため、マンパワーが圧倒的に不足していると聞いています。同僚も順次熊本に派遣されており、様々な課題が判明しているところ

です。情報部門の一員として日常業務の課題だけでなく、災害時の課題解決ができるものを考えていかなければならないなと感じています。

(2014 年度 BCJA 奨学生、Computer Science, University College London.)

2015 年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告

ロンドンで現代アートを学ぶということ

山本 浩貴

私は、一橋大学で社会学の学位を取得した後、2011 年から 2012 年まで、University of the Arts London(UAL)の Chelsea College of Arts の修士課程で芸術学を専攻しました。2013 年から、同カレッジの博士課程に進み、4 年目の現在は、これまでの成果をもとに博士論文の執筆を行っています。

一般的には金銭的な助成を受けることの難しい、現代アートという分野の研究を積極的に支援していただき、BCJA のみなさまには心より感謝しております。まず、その点について、お礼を申し上げます。

本レポートでは、まず、私の研究について、次に、ロンドンでの私の生活について、簡単にご紹介させていただきます。最後に、日本ではあまり浸透していない「プラクティス・ベース (practice-based)」の研究について触れながら、現代アートを博士課程で研究することについて私の考えを述べてさせていただきます。

ロンドンでの研究

私の研究対象は東アジアの現代アートです。とりわけ、「ソーシャリー・エンゲージド・アート(socially engaged art)」と呼ばれる、社会的実践に関心があります。ソーシャリー・エンゲージド・アートは、1990 年代以降欧米を中心に議論されるようになり、現在ではアジアや中南米など他地域にも広まっています。最近では、日本でも関連する展覧会が開催されるようになりました。

私の関心は、東アジアのソーシャリー・エンゲージド・アートを、欧米とは異なる、その地域独自の背景や文脈から論じることです。具体的には、戦争や植民地化の歴史やその影響、あるいは戦後長らく続いた冷戦体制による分断構造といった背景です。それにより、東アジアの社会的実践を見る新しい視座を提供することが可能となり、現代アート史における 1 つの貢献をなすことができると考えます。

また、私は 1980 年代にピークを迎えた、イギリスの黒人アーティストたちによる、反レイシズムの芸術運動についても研究しています。その目的は、「ブラック・アーツ・ムーブメント」と呼ばれるこの運動を現代東アジアの政治的状況から再評価することにより、レイシズムや民族対立にアートがどのよう

なかたちで取り組みことができるかについて考えることです。

ロンドンでの生活

私は、UAL の Research Centre for Transnational Art, Identity, and Nation (TrAIN) に所属しており、この研究所を中心に研究生活を送っています。TrAIN は、非欧米圏のアート・デザイン・建築に関する研究所であり、日本などのアジアやブラジルなどの中南米を専門とする研究者が多数在籍しています。

イギリスの博士課程では、基本的には自主性が重んじられるため、学生は自ら研究会や学会に参加し、ネットワークを作りながら、自分の研究を進めていくことが期待されます。私も、月に 1 度指導教官の先生と面会して進捗を報告し指導を仰ぐ以外は、自ら学会発表の機会に申し込み、幅広いネットワークを作りながら研究を進めてきました。昨年度からは、指導教官の先生と読書会を企画し、東アジア文化研究の著作や論文を参加者と講読しながら、議論を深めています。

研究生活とは離れた、普段の生活については、特にここで述べるようなおもしろいことはないのですが、多くのロンドンの留学生と同じように、物価の高さゆえに、私も慣れない自炊をすることが多いです。たまに息抜きのために友人とパブに行くこともあります。日本からの留学生は減っているとは言われますが、いまだにイギリスは日本からの留学生にとって、現代アートを学びに来る国として人気があります。ですので、幸いなことに、日本からの友人もたくさんでき、そうした友人から日々刺激を受けながら生活しています。

博士課程で現代アートを研究するという事

私は、現代美術の作家としても活動しながら、この研究を行っています。もちろん、私の作品は、博士課程での研究テーマと密接に結びついています。つまり、私は、東アジアの様々な社会的・政治的な問題にアートを通してアプローチするような実践を続けてきました。その例を 2 つほど紹介します。

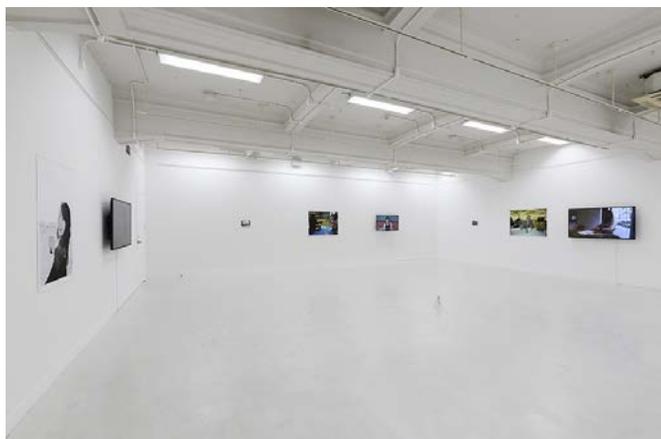


写真 1: 「他者の表象、表象の他者」(2015)

2015 年には京都芸術センターで個展「他者の表象、表象

の他者」を開催させていただきました。この展覧会のために、私は京都に 2 ヶ月ほど滞在し、日本以外の国から京都に移住してきた人々といっしょに様々なプロジェクトを行い、展覧会ではその記録映像や写真を使ってインスタレーションを構成しました(写真 1)。2016 年にはダラム大学のオリエンタル美術館でのグループ展に参加し、同美術館の持ったたくさんの資料を活用したインスタレーション作品を作りました(写真 2)。



写真 2: 「オリエンタリズムからポスト・オリエンタリズムへ」(2016)

私の作品やプロジェクトには、理論的な分析や考察が不可欠であり、博士課程での研究においても、理論と実践が密接に関連しています。このように、実践がその研究の重要な核となるようなリサーチを、「プラクティス・ベース」のリサーチと呼びます。このリサーチは、イギリスでは特にアートやデザインの分野においてとても盛んです。アートやデザインの社会的実践を発展させるために、このプラクティス・ベースのリサーチの重要性はますます高まっています。BCJA の奨学生であったことを誇りとして、引き続き研究と制作に精一杯努力していきたいと思えます。

(2015 年度 BCJA 奨学生 Chelsea Collage of Arts, University of the Arts London.)

2015 年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告

留学レポート

内藤 春香

はじめに

2015 年度 BCJA 奨学生として、London School of Economics and Political Science (LSE) 大学院にて「国際開発と人道危機」修士課程を修了致しました、内藤春香と申します。この度は、ご支援いただきました関係者の皆様に、心より御礼申し上げます。BCJA 奨学生として過ごしたロンドンでの一年間について、以下のとおりの報告させていただきます

す。

留学先について

私が留学していた LSE は社会科学に特化した研究・教育機関であり、政治経済やビジネスの分野で多くの人材を輩出しています。160 以上の国と地域から留学生を受け入れており、極めて多様性に富んだ環境となっています。とりわけ、私が所属していた国際開発研究科 (Department of International Development) は、開発途上国 (特にアフリカ各国) からの留学生が多く、彼らとの授業内外での交流は国際開発学を専攻する一学生として、非常に有益なものでした。教授陣もそれぞれの分野において世界的に有名な方ばかりで、自分が学部時代に引用していた教授の授業を初めて受講したときの興奮は、未だに忘れられません。なお、多くの教授は多忙の中でもオフィスアワー等、学生と会う機会をたくさん設けており、オープンな環境を提供してくれました。また、LSE のキャンパスはロンドンの中心地 Holborn に所在し、他ロンドン大学のキャンパスや図書館、NGO 及び国際機関の事務所、シンクタンク等にもアクセスしやすい場所にあります。このため、ロンドン市内で開催されるパブリック・レクチャーに参加したり、インターンやボランティア活動を行ったりと、授業時間外も様々なアクティビティに勤しむことができます。

LSE で出会った仲間は皆、知的好奇心が旺盛で正義感が強く、「この世界をどうにかして良くしたい」という問題意識を抱えて、LSE に行き着いた人たちばかりでした。時にはクラスルームで、時にはパブでビールを片手に、時には寮の部屋で夜通し、コースメイトたちと欧州難民危機や Brexit 等の社会問題、そしてフェミニズムやポスト・コロニアリズムについて熱く語り合ったことは、忘れられない思い出となっています。卒業後、コースメイトはイラク領クルド人自治区やウクライナ、ヨルダン、ブルンジ等、世界中に散らばってしまいましたが、今でも定期的に連絡を取り、近況を報告し合っています。こうして、LSE で一生ものの仲間と出会うことができたのは、非常に大きな財産となりました。



一年を共にした仲間たちと

研究内容

私は「国際開発と人道危機」という修士コースで、紛争中・紛争後の人道支援に係る政治経済 (political economy) の勉強をしていました。とりわけ、人道支援の「安全保障化 (securitization)」と呼ばれる事象に着目し、人道支援という行為がいかにかに (本来の「人道」の道から外れて)、各国の安全保障上の利害を反映するものとなっているか、という問いを研究していました。「人道支援」というのは、本来、赤十字原則 (公平性、中立性、独立性) に則って、支援を必要としている全ての人に対し、平等に提供されるべきものです。しかし、誰が支援の対象となるのか、どの国・機関・団体がその支援を提供するのか、どれだけの金額が使われるのか、その資金を誰が拠出するのか等、あらゆる点において、大国の経済的及び政治的な利害が関わってきます。歴史的に見ても、人道支援と安全保障は常に切り離せないテーマでありましたが、二分野の関係は 9.11 以降、対テロ戦争の文脈でより一層密接になりました。なお、これは米国や英国等、対テロ戦争の最前線にいた国々で顕著に見られた事象だとされています。しかし、研究を進めるにつれ、日本においても同様の変化が起きているのではないかと問題意識が生まれ、卒業研究では日本の開発援助・人道支援政策に焦点を当て、9.11 以降の日本の開発援助政策と安全保障政策の関連性を分析しました。日本においては対テロ戦争だけでなく、東アジアにおける安全保障上の懸念も大きな要因となっていますが、日本の援助政策もディスコース面及び実行面で securitization の道を辿っており、この変化を無批判で受け入れることはできないと考えます。支援を必要とする人々に対して、いかにして真なる「人道支援」を提供することができるのかというのは、答えのない永遠の課題です。



コースでジュネーブの国連本部や NGO も訪問しました

日々の研究活動の他にも、私のコースには Humanitarian Consultancy Project と呼ばれるリサーチ・プロジェクトがあり、国際機関や NGO をクライアントとした調査を行います。私のチームは人道支援機関である赤十字国際委員会 (ICRC) をクライアントに、英国政府の Comprehensive Approach (包括

的アプローチ)政策(政府内外の開発、外交、安全保障・軍事機能の統合を図る政策枠組み)が、ICRCや国境なき医師団等、独立性を謳う人道支援機関の活動にどのような影響を与えるか分析し、ICRCに対する提言を行いました。こうして、実践的なリサーチ及びコンサルティング経験を得ることができたのは、研究者でなく practitioner としてのキャリア形成を目指す私にとって、非常に有益で実りのあるものでした。

帰国後の活動

私は日本に帰国後、政府系の金融機関に就職し、現在は日本企業の海外事業向けエクイティ投資業務に従事しています。日本企業の海外進出をファイナンス面から支援することで、日本企業の国際競争力向上だけではなく、途上国の経済社会発展に貢献することを目指します。「人道支援」の分野と直接の関連は無いながらも、業務を進める上で外交政策やマクロな政治経済動向を常に意識しなければならないため、大学院で学んだ知識や分析力、クリティカル・シンキングの枠組みは非常に役立っていると感じます。今後も、ロンドンでの留学経験を糧に、日本及び世界の発展に貢献できる人材となれるよう、精進して参ります。

(2015年度 BCJA 奨学生, International Development and Humanitarian Emergencies, London School of Economics and Political Science)

2015年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告

BCJA 留学レポート

白髭 牧人

はじめに

2015年度 BCJA 奨学生としてご支援頂き、ロンドン大学・University College London(UCL)にて交通・都市計画の修士号(Distinction)を昨年9月に取得しました。今回は英国留学の生活、及びその後の進路について報告致します。

留学準備

UCL へ進学する以前は、チリで交通調査や都市計画の仕事に従事していました。その過程で途上国の都市が抱える様々な交通問題(交通含む公共サービスへのアクセス格差等)に直面し、交通を含めた都市計画・政策に関するより専門的な知識や最新の研究を学ぶ必要性を感じ、留学を決意しました。また、当時私はまだ同分野では駆け出しの身であり、上記経験以外には地理学の学士号と日本の商社での2年間弱の経験しか持ち合わせておらず、世界中から優秀な研究者が集まる国際都市ロンドンにて学問以外にも多様な人とのネットワーキングを通して、同分野での自分の世界を広げることを目標にしていました。大学院の選定に関しては、UCL 以外にも幾つか候補がありましたが、交通分野で

著名なチリの教授に相談し自分の研究興味に合致する教授を紹介頂いたり、候補先の大学院の各教授に個別に連絡を取り、専攻コースを徹底的に吟味したりと入念な下調べをした上で、UCL を選択しました。

活動内容

英国の修士課程には大きく講義主体の Taught Masters と研究主体の Research Masters があります。私が在籍した Taught Masters の1年間コースでは、9~12月(1 Term)、1~4月(2 Term)の各学期に4つの module を履修し、5月はテスト、6~8月は Dissertation の執筆と非常にハードな日程が組まれていました。コース内容は量・質ともにレベルが高く、1つの module で週に最低本2,3冊以上、論文10本以上の読書課題が出されており、4つの module を履修する為、週の読書目安は大体その4倍でした。また各 module で課されるエッセイ・プレゼンに関する自主読書も加わり、読書量が膨大になる為、Term 毎に読書期間が1週間設けられ、溜まった読書を終わらせる為の貴重な時間が与えられました。講義には UCL 教授以外にもドイツ、チリ、コロンビア等世界各国から著名な研究者、計画者、知事らが訪れ、彼らの経験に基づく講義を受けたり、ストックホルムなど欧州近隣諸国へのフィールド・トリップを通して様々な都市の交通・都市プロジェクトを見学し、その後グループで代替案を模擬作成しストックホルムの都市計画協議会へ発表したりと、実社会の仕事に類似した経験を積むことも出来ました。

また英国の修士過程の特徴として、Critical Thinking の重要性が挙げられます。1つの問題に対する様々な研究・考えを自主読書で吸収し、更にそれに対する自分の意見を元に、ディスカッション(又はエッセイ)の場で創造的かつ批判的にものごとを分析する力を訓練するように常日頃から求められます。特に交通・都市計画の世界では、正解の答えなどあらず、都市に住む人口、経済、文化、環境等の違いにより答え方(対応策)は数多くある為、複雑な問題に対処できるようになる為に、この Critical Thinking は1年間を通して徹底的に鍛えられました。

課外活動

学問以外には、UCL Football Club に所属しました。しかし、週2回の練習及び毎週末の遠方での他大学との試合は学問との両立が難しく、1 Term のみの参加となり、2 Term は学業及び卒業後の就職活動に専念せざるを得ませんでした。その一方で、自分の専攻分野に限らず、国際都市ロンドンで頻りに開催される多種多様なセミナーに参加したり、Just Space という組織を通して、ロンドンプランの改定に伴う調査の為にコミュニティ活動に携わったりと、修士課程1年間という限られた時間を最大限に有効利用することに努めました。

その後の進路

上述したセミナーの1つに、外務省主催による国際機関の説明会があり、そこでネットワーキングを経て、スイス・ジュ

ネーブにある国際労働機関 (ILO) で半年間有給インターンシップの機会を得ました。ILO は、英国へ留学するきっかけとなった途上国での交通アクセス問題を解決する為の政策立案を推進しており、employment intensive approach という現地労働力を活用した道路整備を途上国の地方で実施し、交通アクセス問題の改善に加え、雇用創出や貧困削減など社会貢献において重要な役割を担っています。しかし ILO の業務はまだ現場経験の少ない私にとっては机上の空論であることが多く、修士課程で学んだように、交通の問題に対処する為には、都市の将来像を描きながら、その実現に向けた都市・社会経済インフラ開発の総合的なプランニングが重要です。その為、今後は日本の民間企業に身を置き、途上国の交通・都市計画のプロジェクトに携わりながら、日本含め世界がより良い場所となるように貢献していきたいと考えております。

終わりに

本日に至るまでに、BCJA を始め多くの方々に支えて頂きました。この場を借りて、心より感謝を申し上げます。今後は交通・都市計画の分野で世界を舞台に活躍できるように、日々精進して参ります。

(2015 年度 BCJA 奨学生, MSc Transport and City Planning, University College London)

2015 年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告

留学レポート :

金融街の傍らで学んだ英国ジャーナリズムの業界標準

長谷川 高宏

2015 年度 BCJA 奨学生として City, University of London で経済ジャーナリズムの修士号を取得してまいりました。以前は、日本の経済誌で記者兼編集者をしていましたが、思うところあって退職。国際的な経済報道の総本山(と私が勝手に考える)ロンドンで、世界を相手にした経済ジャーナリズムとはどんなものか、また経済記者としての自分に国際的な環境でどこまで通用する潜在能力があるのか、そんなことが知りたくて留学しました。海外経験はそれまでほとんどなく、超えなければならない言葉の壁を考えると在職したまま留学を実現させるのは困難だったと思います。組織の後ろ盾がない中で当奨学金の支援を受けられたことはありがたく、大きな励みとなりました。おかげさまで With Distinction の評価でプログラムを終えられましたことを報告するとともに、この場を借りて BCJA の皆様に深く御礼申し上げます。

留学まで

英国への留学を考えるようになったのは、ちょっとした偶

然からでした。ウォールストリートジャーナル (WSJ) を眺めていたときの事です。IMF (国際通貨基金) について記事を書いている記者が米国人であるにもかかわらず、シティというロンドンの大学でジャーナリズムの修士号を取得していることをたまたま発見し、このとき何かひらめくものを感じました。

ロンドンといえば、エコノミストやファイナンシャルタイムズといった世界的な経済メディアの本拠地です。調べてみれば、シティ大学は英国でナンバーワンのジャーナリスト教育機関で、実際のメディアとも深い接点を持っている様子。経済報道のコース責任者は元 BBC の経済記者でした。大学に聞いてみると、ジャーナリズムのプログラムは基本的に英語ネイティブが対象だが、国際報道と経済報道は例外で留学生を積極的に受け入れているとのこと。なんだかこのコースは自分のために用意されているような気がしてきて、ロンドン行きを決めました。

金融街の傍らで

大学は金融街「シティ」の名を冠しているだけあって、ガーキンやシャードといった高層ビルが視界に入り、少し歩けばセント・ポール大聖堂が見えてくるような場所にありました。シティ・オブ・ロンドンの境界のあちこちには、グリフィンという狍犬のような怪獣の像が鎮座し、目を光らせています。英国の富を象徴し、政府に隠然たる影響力を持ち、そして世界の租税回避地にも密接なネットワークを張り巡らせるミステリアスな国際金融センター、シティ。その傍らで経済報道の勉強ができたのは貴重な経験でした。

在学中も多国籍企業による税金逃れは繰り返し大きなニュースになっていましたし、コース後半にはパナマペーパーズの疑惑が爆発しました。大学にはタックスヘイブンに関する世界有数の研究者が複数在席しており、こうした専門家に話を聞きながら、国際的なオフショア金融市場について理解を深めることができたのはロンドンで勉強する醍醐味のひとつでした。課題制作のために、シティで働く金融業界関係者に街頭インタビューを行ったのもいい思い出です。

そして、2016 年6月には EU 離脱の国民投票がありました。速報結果が離脱側に傾くや英ポンドが急落、投票結果が確定したその朝には首相が辞任するという、速いペースで推移するニュースを現地で目の当たりにしながら、英国の政治経済だけでなく、それを報じるメディアについても急速に理解を深めることができたと思います。このようなタイミングで英国に留学できたことは、ジャーナリストとして視野を広げる上でとても幸運だったと感じています。

ブートキャンプ

大学院の勉強は想像以上に実践的でした。もともと、シティ大学のジャーナリズム学部は実践的な教育で知られているようですが、実際やっていることはといえば限りなくトレーニングに近い内容です。基本は、記事を書いたり、番組をつくらしたり、ジャーナリストとしての制作物を生み出すこと。ときには論文風エッセイの提出を求められることもありますが、

そんなときでも「あなたがたはジャーナリストなのだから、ジャーナリスティックなスタイルで書くように」といった注意喚起があるほど実践を重んじる点は徹底していました。経済報道のプログラムでは、英国の予算演説をオンラインで速報する演習などが目玉の学生プロジェクトで、この特設サイトは一般にも公開されています (<http://www.citybudgetreport.com>)。

やや面食らったのが、コース直前に設けられた「ブートキャンプ」という名の導入セッション。米国海兵隊の地獄の特訓を思わせる名前におのきおながら参加してみると、そこで行われていたのは街ネタを拾ってニュースに仕立てるという、いかにも新人記者に与えられそうな課題。ただ、街ネタというと簡単に聞こえるかもしれませんが、ある意味では本職の記者以上に難しい課題を課されていたように思います。というのは、所属媒体を持たない学生という中途半端な身分では話を聞くのも一苦勞。正直、組織の看板を使いながら、土地勘のある担当分野を取材しているサラリーマン記者の仕事のほうが簡単なのではないかと思えたほどです。

これを言葉や文化の壁のある留学先で行うのですから、ブートキャンプの洗礼はなかなかのものでした。学生として取材許可を求めるにも何か英国流のコツがあるのではないかと思います、講師にアドバイスを求めると、「自分はフリーランスで〇〇という媒体に記事を書き込む予定で取材している。そのようなことをウソにならない範囲で言うておけばよい」との返答。なるほど、ここは大学院であっても学生ではなく、ジャーナリストのアイデンティティを明確に持って参加すべきコースなのだと再認識させられたのでした。

留学の副産物

独自取材を行う難しさは、その後もたびたび味わうことになります。記事やテレビのニュースパッケージを制作する課題には「独自の取材源を何人以上」という要件が加えられることがしばしば。媒体名が使えない中では取材依頼の段階で壁にぶち当たることが多く、組織に所属せず個人として仕事をしているフリーランスの偉大さに思いをめぐらせることが増えたのは、この留学の意外な副産物でした。

英国で新聞やテレビを見ていて気づいたのは、日本とは比べものにならないほどジャーナリスト個人の名前が前面に出ていることです。組織所属のコラムニストでも、あたかもピン芸人であるかのように写真付きでユニークな記事を書いている人が多く、こうした点も含めて、個人としての仕事について、これまで以上に深く考えるようになりました。

また、今回の留学は、記者としての仕事の広がりについて認識を新たにすよききっかけにもなりました。といいますのは、英語圏のマルチメディア展開は日本のはるか先を行っているからです。たとえば BBC の記者はテレビでレポートや解説を行うだけでなく、オンラインで記事も書けば、ラジオにも出演するといった具合。FT など新聞社のサイトにも記者や編集者による動画が多数アップされていますし、インタラクティブなデータコンテンツも半ば常識になりつつあります。こうしたクロスオーバー的な動きは日本ではまだ、そこまで一般

的ではありませんが、英語圏のメディアではこれがスタンダードなのでしょう。

大学でもこうした流れを反映してか、学生は出身媒体に関係なく、活字、オンライン、テレビ、ラジオと主要フォーマットに関する基本スキルはひととおりカバーすることになっていました。講師陣は BBC やロイターの出身者が多く、記事の書き方や番組制作に関するスタイルの点でも、大学ではまさに英国ジャーナリズムの業界標準が教えられていたと思います。結論から言えば、記者／編集者として日本でやってきたことは基本的に海外でも通用すると感じましたが、細かな点ではいろいろと違いがあり、そのひとつひとつが目から鱗でした。

日本とは違う報道スタイル

これは学校で明確に教えられたことではないのですが、現地で学ぶうちに、なぜ英国のブロードキャスターたちが極めて攻撃的な態度でインタビューに臨むのか、その理由もなんとなく見えてきました。BBC は中立を保つことが法律で義務づけられています。そのため、番組が政治家などに宣伝利用されるのを防ぐためにも、おそらくインタビュアーはきつい質問を浴びせることでバランスをとろうとしているのだと思います。また、取材される側にも、それがメディアの役割だと、ある程度は受け入れる土壌があるように見えました。日本のテレビでは、詰め寄るようなきつい質問はまず見かけませんから、「中立・公正」という報道の基本概念からして、日英では思いのほか大きな違いがあるのかもしれませんが。

もう一つ、コースを通じて感じたことがあります。それは、自分がよく知っているはずの日本を扱う場合でも、国内の媒体と同じ感覚で報じているのは国際的な訴求力に欠ける可能性が高いということです。私は日本の経済誌で長く働いてきたため、大学院でもアベノミクスやマイナス金利など、日本の経済事象をネタに記事を書くことがありました。しかし、こうしたテーマの記事にする場合は、日本についてほとんど知識がない人でも関心が持てるように、世界的に今どのような現象がどんな観点から関心を集めているかを意識しながら、より幅広い視点で意味づけを考える必要があると感じました。米国や中国のように世界中が注目している地域を扱うのなら話は別でしょうが、日本に対する国際的な関心はさほど高くないのが現実です。

そして、このような考えを持つに至ったのは、国際色の強いロンドンのプログラムで学んだことが大きく影響しているのだと思います。経済ジャーナリズムのクラスは極めて国際的で14人のクラスメイトのうち英国人は3人のみ。ほかにはロシア、ルクセンブルク、フランス、ポルトガル、スペイン、インド、シンガポール、タイ、ベトナム、中国といったように、まるでプチ国連とでもいった雰囲気でした。授業で話題になる内容も、国際経済に対する影響度を反映してか、英国で学んでいながら中国関連のものがかなり多かったように記憶しています。

また、経済報道のコースには、英エコノミスト誌の著名記者を記念した財団の支援のもと、上海とニューヨーク(および

ワシントンDC)で各1週間~10日ほどのサマースクールが組み込まれており、世界経済の2大拠点について実地に理解を深める機会にも恵まれました。とりわけ、米国ではフォーブス誌時代にエンロンの粉飾決算を暴いたベサニー・マクグリーン氏のほか、WSJ、ニューヨークタイムズなど有力メディアの編集長、経営陣、コラムニストなどから直接話を聞くことができ、一記者として大きな刺激を受けました。



ニューヨークタイムズ本社にて。国際色豊かなクラスメイトと。

このように英国にありながら、英国の枠を超えた国際的なコースで学ぶことができ、日本の出版社でほぼ日本に関連した事柄だけを、ほぼ日本人の観点からのみ取材してきたこれまでの自分の仕事をとらえなおす貴重な時間を与えられたと思います。今後はロンドンで学んだことを発展させるべく、国際ブランドのメディアで経験を積んでみたいと考えていますが、この計画がどこまで現実的かは正直よくわかりません。いずれにしても、今回の留学経験を生かして、少しでも付加価値の高いアウトプットができるよう研鑽を続けていく所存です。(Takahiro.Hasegawa@city.ac.uk)
(2015年BCJA奨学生: MA Financial Journalism, City, University of London)

2015年度BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告

留学レポート

東田 全央

はじめに

イングランド北部にあるシェフィールド大学の修士課程にて一年間留学してきました。私の元々の専門はソーシャルワーク(社会福祉士・精神保健福祉士)で、日本では障害分野や精神保健福祉での実践などに関わってきました。2011年以降は、NGOスタッフとしての東日本大震災における心理社会的サポート事業での支援活動や、青年海外協力隊ソー

シャルワーカー隊員としてのスリランカでの活動に携わってきました。その中で、開発途上国における地域保健福祉、とくに障害分野について関心を深め、さらに活動していくための知識・技術・経験を高めていくことが必要と考えました。そして、英国内でも珍しい、国際開発分野における公衆衛生学コースに入学することを決意しました。本コースはまさに実学的な内容で、他の学生とともに学び合う、大変有意義な一年となりました。

私の留学に対してご支援いただきましたBCJAの皆様には厚く御礼申し上げます。今後、留学で得させていただいたものを社会に還元していきたいと考えています。

研究等の内容

MPHIDコースには大きく二つの特徴がありました。第一に、本コースは地理学部と保健関連学部との共同コースです。実際に授業の約半分ずつが開発系と公衆衛生系にわかれています。コースの学生は13名で、地元等の英国学生が半数以上、英国外の欧米2名、アジア2名(韓国と私)、アフリカ1名という構成でした。他学生と議論しあいながらこれまでの個人的な実践を振り返り、そして理論や世界的な動向と関連付けられる、またとない機会でした。

たとえば、保健関連学部では「災害・緊急事態マネジメント」の科目を受講しました。私自身、阪神大震災での被災経験や、東日本大震災支援活動での一年数月の現地駐在(岩手県陸前高田市)経験などありましたが、学術的に学ぶのは初めてでした。組織レベルでの意味のある避難訓練や救援活動から、国や自治体レベルでの減災計画やハザード分析まで、グループ演習と講義を通して総合的に学ぶことができました。理論、実践、経験を結びつけることができる科目でした。



写真1. タンザニアの農村部での訪問調査の道中(2016年3月)
(同行者からの撮影・使用許可は得ています)

第二の特徴として、学生は基本的に二回の途上国での調査を行いました。私の場合は3月にタンザニアでのフィールド調査演習(写真1)に参加し、6-7月には修士論文のためのスリランカでの調査を実施しました。まさに実学・実践的な

内容で、たいへん学びが多かったです。これまで本コースのフィールド調査演習はネパールやケニアで行われ、タンザニアは今回が初めてだったためか、大学と現地側の調整や準備等が整っていない状況でしたが、それがかえって現実味のある良い経験となりました。関係機関との、ときに困難な調整や合意を学生自身が現場で行うことも何度かありました。私は3名のグループで5歳以下の小児栄養、とくに栄養失調について、北東部の村で調査しました(写真 1)。調査方法は母親等の保護者へのインタビューと、母子保健関係者へのインタビューでした。国内の中では栄養失調の率が比較的低い地域ですが、厳しい状況の世帯にも数件出会いました。そして、小児の栄養失調と、世帯の生計や貧困、女性養育者の過度な負担との関係などについて探索しました。調査方法等について、同行教員からのフィードバックを現地で受けられるというのも非常に貴重な体験でした。

それらの演習や科目での学びを元に、修士論文の作成にあたっては、スリランカにて2016年6月から7月末までの8週間、若年・青年層の障害当事者の社会参加とそれにかかわる要因についての調査を実施しました。最終的には、「優等」にて国際開発・公衆衛生学修士(MPH International Development with Distinction)を修了することができました。

その他、留学期間中に国際大会発表2回(写真2)、英文論文2本掲載、英文実践報告1本掲載を行うことができました。英語スキルはまだまだ未熟ですが、貴重な機会となりました。



写真2. 第二回 CBR 世界大会にて発表(クアラルンプール, 2016年9月)

日常生活・課目外活動

開発途上国に滞在中の合計3か月間以外は、大学学生寮に滞在していました。ジャマイカ、ロシア、アラブ首長国連邦、コロンビア、カナダ、日本(私)という6名のフラットメイトで

の共同生活でした。MPHID コース同様、多文化の環境でした。調理は共同キッチンであったため、ときどき母国の料理について教えてもらったりもでき、大変面白かったです。日本食は数回食べた程度で、そのほかは私の大好きな多国籍料理を中心に食していました。

また地元シェフィールドの人々との交流もありました。たとえば、ある方のご厚意でシェフィールド市内を案内していただきました。シェフィールドは良質なステンレス製品で有名なのですが、案内いただいて初めて、その関連する場所を訪れることができました。またホームガーデンパーティーにも参加させていただき、英国の雰囲気を感じることができました。地元の方とのつながりがあるからこそ知れる文化や歴史があると感じました。

大学構内では、授業以外のセミナーや講演会が週一回程度は開かれていたので、興味があるものにはできるだけ参加するようにしていました。とくに、公衆衛生と開発の分野では「不平等」や「格差」は本当によく取り上げられるテーマになっており、私も関心を持って学びました。また、ノーベル賞受賞者の連続講演会企画などが学内であり、シェフィールド大出身のノーベル賞学者等の著名人の話が生で聴けるのは本当に貴重な体験でした。学業のモチベーションにもなりました。

さらに、大学主催で本コース外の「宗教相互学習コース」にも参加しました。これは、自分とは異なる宗教や文化の人とペアを割り当てられ、交互にインタビューして、宗教観や文化について建設的に学び合うというものです。私はナイジェリア人のカトリック教徒とペアになり理解を深めました。それに関連して、以前、青年海外協力隊としてスリランカに行き、仏教(上座部)やヒンドゥ、イスラームなどに触れ、その学びを保健福祉の視点から記した論文が英文雑誌に掲載されました。日本ではセンシティブな話題かと思いますが、学びが深められて幸運でした。

今後

すでに帰国し、現在、国際開発関係のシンクタンクにて従事しています。また、2017年度からは博士課程にも進学する予定となっています。将来的には、シェフィールド、タンザニア、そしてスリランカでの経験を踏まえ、今後も開発途上国の社会保障や障害分野等での活動に、何らかの形で貢献していきたいと考えています。改めまして、この度はご支援いただき誠にありがとうございました。

(2015年 BCJA 奨学生: Public Health in International Development, The University of Sheffield)

2016年度 BCJA 会計決算報告書

(2015.11.1~2016.10.31)

(一般の部)

収入の部

科 目	金 額
前年度繰越金	△342,945 円
年会費@2,000	220,000 円
合 計	△122,945 円

支出の部

科 目	金 額
ニューズレター	35,640 円
総会案内状	11,000 円
発送費	80,080 円
封筒代	11,649 円
アルバイト	60,000 円
文具	5,292 円
Web 更新費	21,886 円
振込手数料	12,008 円
合 計	237,555 円

2016年10月31日現在の資産状況

次期繰越 (a)	△360,500 円
----------	------------

(BCJA 奨学基金の部)

収入の部

科 目	金 額
前年度繰越金	395,389 円
寄付金	960,000 円
合 計 (b)	1,355,389 円

支出の部

科 目	金 額
奨学金@150,000×4人	600,000 円
振込手数料	1,728 円
小計 (c)	601,728 円

2016年10月31日現在の資産状況

次期繰越 (a+(b-c))	753,661 円
----------------	-----------

2017年度BCJA奨学基金趣意書

2017年1月31日

BCJA 会長 青柳昌宏

BCJA 奨学基金は、2000年よりBCJA会員の有志の皆さまからの寄付金を基盤として、英国留学生の支援活動を着実に進めてきております。昨年度は、4名の留学希望者に対して、奨学金を授与することができました。

今年度も奨学生の募集を行いますので、奨学基金へのご寄付をお願い申し上げます。

記

一口 5,000 円 二口以上でお願い申し上げます。同封の郵便振込用紙に、振込額、住所、氏名をご記入の上、下記口座宛にお近くの郵便局でお手続きいただければ幸いです。

ご寄附頂きました方々への領収書等の発行は特に致しておりませんが、必要であればご連絡、或いはご寄附の際に振込用紙にその旨、ご記載下さいますようお願い申し上げます。

尚、御礼状に関してはNewsletterにて代えさせていただきますことを御理解下さい。

口座記号番号:00180-0-426794

加入者名:BCJA 奨学基金

事務局 島津幸男

〒745-0004 山口県周南市毛利町 3-37-1-612

連絡先 Tel:090-8773-1024 Fax:0834-32-4030

e-mail: shimazu@herb.ocn.ne.jp

BCJA の銀行口座のお知らせ

金融機関名: ゆうちょ銀行

金融機関コード:9900

店番: 019

店名:0一九店(ゼロイチキュー店)

科目: 当座

口座番号: 0426794

受取人名: BCJA ショウガクキキン

要注意!

総会参加費等、BCJA への振込時、ネットバンキングをご利用の会員の皆様には、次の点をご注意下さい。

振込先 : ビーシージェイエー(BCJA)

2016年度BCJA奨学基金協賛者一覧

2016年10月現在

協賛者総数	75名	総額	960,000円
派遣者数	4名	奨学金総額	600,000円

協賛者氏名 (敬称略 順不同):

齊木臣二	山口隆美	大野吉弘
阿部和彦	山田昭廣	池上忠弘
安藤	山田和廣	池田修
安藤仁介	児玉昭子	中山修一
稲垣久雄	時枝正	町並陸男
横山俊夫	小鍛冶繁	長澤泰
岡井清士	諏誘部仁	塚原康雄

岡田博有	須田英明	田口博國
河越正明	水田珠枝	田中治彦
河本直紀	水田洋	田中典子
笠京子	杉浦和朗	田中晉
関谷透	菅原基晃	島津幸男
丸尾	西田宏子	藤田道也
橋都浩平	青柳昌宏	南方暁
原山博善	斉藤勉	梅川正美
古澤嘉生	石井丈夫	白鳥令
江田五月	石原理	浜田将太
高柳和夫	石渡淳一	武藤春光
細田衛士	千葉恵	武内重二
三浦省五	前川功一	平孝臣
山下純宏	草間芳樹	米元純三
山下博	村田久美子	北川正信
山口勝己	多田稔	本吉邦夫
山口泰夫	太田隆美	野城眞理
榊瑞希子	齋藤文良	有村祐輔

注記：振込票でお名前が不鮮明であった方については、申し訳ございませんが、苗字のみ標記いたしております。

[編集後記]

青柳会長より後を受けて、27号より編集を担当させていただいております。今年も出版が大幅に遅くなりまして大変申し訳ございません。皆様のおかげでなんとか出版に漕ぎ着けたこと、心より感謝申し上げます。

本レターへの投稿を幅広く募集しております。皆様の留学体験談、研究・事業活動のご紹介、英国との交流事例、最新の英国事情など、英国と日本の交流に関する内容について、よろしくご投稿をお願いいたします。既に原稿をお送りいただき、掲載されました方々にも、続報の投稿をぜひよろしくお願いいたします。また、特集テーマ、原稿依頼先の案、紙面構成、編集方針などのご意見も積極的にお寄せいただければ幸いです。

なお、本レター発送については、会計担当の島津様にご協力いただきました。この場を借りて、心より感謝いたします。

(石井加代子、慶應義塾大学、London School of Economics, 2003-2004)

ishiikayoko@hotmail.com

BCJA ホームページについて

ホームページ担当

BCJAのホームページ <http://www.bcja.net/>では、過去のニューズレター閲覧、BCJA 英国留学奨学金、BCJA 活動状況、メンバー向け案内などがご覧になれます。幅広く有益な情報を提供できるサイトにするため、どうぞ皆さまからのご意見、ご希望をお寄せ下さい。

Google グループ[bcja]のご利用案内

Google グループ担当

BCJA 会員の情報交換、情報伝達などに活用していただくために、Google グループの中に BCJA 会員専用グループとして、[bcja]グループを新規に設定いたしました。これまでの Yahoo グループのメンバーの方は、登録内容を移行しております。登録を希望される方は、Google へ登録後に下記の URL にアクセスして下さい。

<https://groups.google.com/forum/?hl=ja#!forum/bcja-member>

または、masa_aoiyagi5@yahoo.co.jp までメールでご連絡をお願いいたします。